

カンボジアリレートークを開催しました！

2026年1月22日（木）広島大学カンボジアセンター主催にて、カンボジアリレートークがオンライン開催されました。広島大学には、1990年代からカンボジアからの留学生受け入れ実績があります。今回のリレートークは、学術領域や教員・学生の世代を超えて、広島大学を中心にしたネットワークを広げることを目的に開催されました。センターの連携教員、国際部の協力を得て、広島大学卒業生とともに、在學生を紹介いただき、大学内でカンボジアに関わる教員等、総勢34名の参加がありました。セッションの開会は、広島大学カンボジア校友会会長の Bulay 氏 (Ministry of Education Youth and Sport, Deputy Director General of Higher Education) に言葉をいただき、卒業生と在學生が集まる機会は、カンボジアの国の発展のために何が必要なのか、改めて考えることのできる良いチャンスになることが強調されました（写真1、2）。引き続き行われたリレートークでは、学部の垣根を超えて、現在在学中の学部・大学院生が、各自10分程度のプレゼンテーションを行いました。



写真1（広報ポスター）



写真2（Bulay 氏）

プレゼンテーションの内容は、研究討論ではなく、学際的・世代を超えた対話を促進する内容とし、広島大学に入学した動機から始め、現在取り組んでいる研究テーマと、研究生活で最も充実した瞬間、そして学位取得/修了後の進路希望の4つの項目を設定しました。合計5領域の在學生・卒業生からの発表となりました。

最初の発表者は、大学院人間社会科学研究科国際教育開発プログラム博士前期課程に在籍の Sar Sophea さん（写真3）です。広島大学での留学への動機は、カンボジア教育省と関わりがあったことや、広島大学へ留学した同僚の存在でした。大学における研究活動に関しては、国際教育には様々なコースのバラエティーあることが魅力的でした。プログラム参加中、学び追及する楽しさと共に、母国での実践が研究活動を通じて、新たな学びとなることを参加者と共有することに充実を感じています。



写真3

2 番目の発表者、大学院医系科学研究科公衆衛生学プログラム博士課程前期に在籍中の Ouk Samboramey さん（写真4）の留学の動機は、母国でコンピューターサイエンスの学位を取得後、カンボジア労働職業訓練省の国家社会保障基金に勤務中、社会保険と健康特に非感染症に関する関連を迫及していきたいと、大学院への進学を決意したことでした。大学へは、JDS(人材育成奨学計画：The Project for Human Resource Development Scholarship) 奨学金プログラム制度の学生として来日しました。卒業後は、カンボジアに戻り、NSSS（国家社会保護システム）での専門職を継続する予定です。また日本で得た知見やエビデンスベースの知見を活かし、カンボジアの保健システム強化の発展を支援したいと考えています。

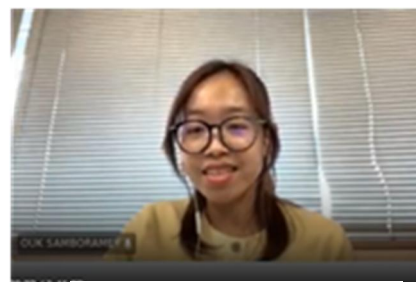


写真4

3 番目の発表者は、大学院先進理工系科学研究科理工融合プログラム博士前期課程に在籍している、SIM SOKCHAMROEUN さん（写真5）です。広島大学を選んだ理由は、公衆衛生分野や工学に高度な学際的基盤を提供していることです。公衆衛生だけでなく、環境工学など、所属している研究室では、疫学や社会保障制度分析といった多角的な研究分野をさらに深く学ぶことに魅力を覚えました。現在、非感染性疾患における医療の格差に焦点を当てています。非感染性疾患は、心血管疾患、慢性呼吸器疾患、高血圧、糖尿病などを対象としています。また、国民の医療へのアクセスにおける格差や不平等を解消する方法についても研究を進めていて、単に質の高い医療を受けるための実費を提供するだけでなく、医療アクセスにおける国民の実際の体験を把握・評価することを目的として実施しています。

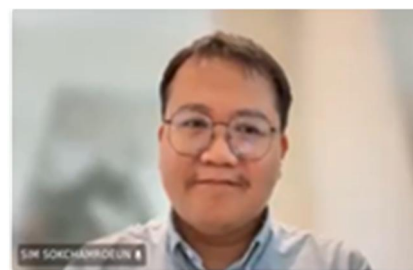


写真5

4 番目の発表者は、医系科学研究科総合保健科学プログラム博士課程前期に在籍中の、Len Leang E さん（写真6）です。入学動機は、病院での勤務中に、保健省から大学のプログラムへの参加を推薦されたこと、そして、国内ではたらく政府職員を対象とした JICA による奨学金で留学が実現しました。病院で勤務する看護師として、病院、臨床での看護管理など、母国でも生かせる実践内容を学びたいと思いました。大学院での研究活動は、高度な研究、管理、運営、革新に重点を置いていることが、カンボジアでの教育とは異なると思います。日本には、看護ケアや看護管理において国際的なガイドラインで日本に適合するように導入されているものがあり、それらのガイドラインがどのように実践で導入されているかを学ぶ必要があります。広島大学病院で

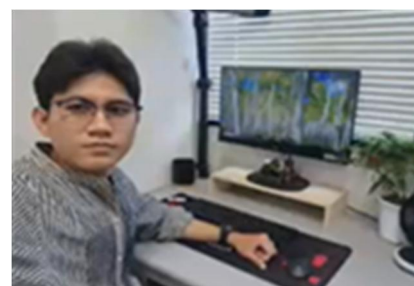


写真6

使用されている日本のガイドラインは、非常に優れており、我が国にとっても有益だと思います。帰国後、研究では看護師の能力開発に焦点を当てているので、広島で学んだことを帰国後に応用したいと思います。

5番目の発表者は、医学部歯学科、国際歯科コース（IDCプログラム）に在籍する歯学部3年生の Heanh Sochannyda（写真7）さんと Kun Ratanaklina（写真8）さんです。お二人とも、日本での生活は2年目に入り、あと2年間滞在する予定です。広島大学を選んだ動機はいくつかあります。日本の文化や生活様式に強い関心があったこと、日本が清潔で安全だとよく言われるのを耳にし、日本へのあこがれがありました。実際に2年間生活してみて、日本が本当に安全な国であり、食べ物も非常に美味しいと実感しています。さらに、日本の教育システムが高い水準にあることを実感しています。そのほかの動機として、留学を通じて自分自身に挑戦したいという思いもありました。広島大学を選んだ理由は、母校である健康科学大学の奨学生として、広島大学の交換留学プログラムに参加することができたからです。特別授業として臨床見学クラスがあり、日本のクリニックや病院の業務の流れを観察できたことも有効です。プログラム修了後、カンボジアに戻り歯科大学に残りの2年間を修了し、歯科医師免許（DDS）を取得し、臨床技術の向上と実践経験の蓄積に重点を置きたいです。キャリアについては模索中ですが、長期的には歯科医院の開業か歯科教育分野での活動を目指しています。



写真7

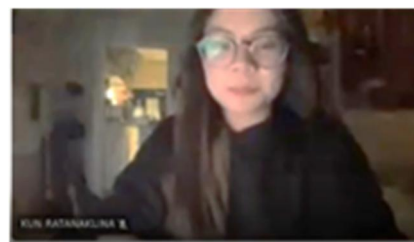


写真8

最後の発表は、卒業生お二人から共同で発表していただきました。Phnom Penh Teacher Education College (PTEC) に勤務されている、Deputy Director の Chanphirun Sam さん（写真9）は、IDECの卒業生で、2010年に広島大学で教育学の修士（教育行政学を専攻）を取得卒業しました。その後、オランダで博士号取得し、約2年間、オーストラリアのグリフィス大学で国際研究員として働いたのち、カンボジアに戻りました。現在、PTECと浅田氏（後述）の勤務するCMACは協働で



写真9

地雷除去プログラム提供を行っています。CMACおよびJICAの連携によって、CMACの指導員の能力開発を支援することで、学生が地雷に関する重要な技術や専門知識を効果的に習得できるよう尽力していきたいと思います。広島大学を卒業後、ヨーロッパで博士号を取得した私は、母国の教育発展に貢献する多くの機会を得ました。皆さんも卒業後は帰国し、

自国を支えるために実際に何ができるかを考えてほしいと願っています。

もう一名の卒業生は、Cambodia Mine Action Centre (CMAC) に勤務される浅田義教さん (写真 10) です。広島大学の IDEC を選んだ理由は、開発問題に貢献しつつ環境問題にも取り組む方法を深めることができると考えたからです。そして環境経済学を通して、このアプローチを学ぶことができると考えました。同時に IDEC では日本語だけでなく英語を主体とした授業があり、この機会を活用したいと考えました。卒業後はラオスに7、8年滞在し、日本の政府が支援する開発プロジェクトを支援する形で、知識と経験を実践の場で活かす機会を得ました。時には日本大使館、時にはJICA ラオス事務所との関わりもありました。現在関わっているプロジェクトでは CMAC の国際的な能力、つまり国際協力サービスや協働の提供に焦点を当てています。これにより CMAC はより高い段階へと進み、ラオスやベトナムといった近隣国、最近ではウクライナとも知識や経験を共有できるようになりました。その中で私の主な役割は、CMAC とウクライナ間の協働を促進すること、CMAC とステークホルダー間の協力を可能な限り促進することです。現在、多くの組織・民間企業、さらには JICA のプロジェクトとの協働可能性を模索しています。



写真 10

卒業生お二人をはじめ、在学生の参加者から広島大学での共通の印象深い瞬間や思い出は、多国籍の学生が集い、時には酒を酌み交わしながら語り合い、研究仲間との絆を築くこと、さらには、セミナーやイベントを通じて学術ネットワークを拡大できることであり、特別な楽しさを感じたと皆で共有していました。そのほかにも、学術的な文章力やプレゼンテーションスキル、研究やデータ分析の能力が向上し始めたと感じ、現在行っている研究が、現実の政策決定をいかに支えられるかを理解できたとのことです。

日本の暮らしや文化について、日本語が思っていたより難しいと感じていること、また食料品や食材がカンボジアのように近所で簡単に入手できないことなど、カンボジアでの生活との違いを感じたとの発表もありました。また、季節の違い (冬がとても寒いのが大変) を感じて、カンボジアの温かい季節を恋しく感じている学生もいました。

8名の発表終了後、本学の卒業生の Dr Sreypouv Ouch (写真 11), (Primary Education Department of the Ministry of Education Youth and Sport 勤務) からコメントをいただきました。

カンボジアからの留学生が、海外で学ぶことは非常に有益です。特に、日本の学生と留学生が交流することで自己成長につながると発言していただいているのを見て、とても嬉しく思いました。参加してくださった各領域から互いに学び合う良い機会だと感じました。ただ一つ伝えたいのは、皆さんが日本で学びを終え帰国した時、カンボジアの専門家としてどんな考え方を母国に持ち帰るかということです。技術だけでなく、日本で得た考え方をどうカンボジアに還元するか、共に考えることが大切ではないかと思います。これが私たちの協力の基盤となります。今後の教育発展に向けて共に歩んでいきましょう。

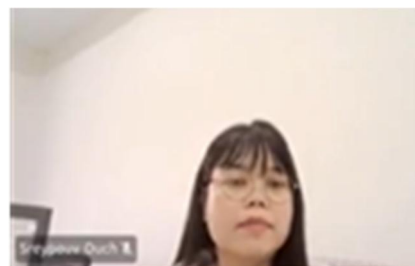


写真 11

最後に、清水欽也教授（写真 1 2）からは、広島大学がカンボジアから、様々な分野から多くの学生を受け入れていることに改めて、大変驚き、理解が深められたこと、広島大学がカンボジア国民の人的安全保障を育むために、広範な領域をカバーしており、この機会と人的ネットワークをカンボジアの未来のために活用することの重要性を強調していただきました。在学生、卒業生、そして将来入学する学生の皆さん、どうかご健康でカンボジアの発展を見守ってください。と、閉会の言葉をいただきました。



写真 12

（カンボジアセンター リーダー 大学院医系科学研究科 加古まゆみ）

#### 参考ホームページ

Cambodian Journal of Educational Development サイト <https://cjed.hiroshima-u.ac.jp/>

CMAC Cambodia Mine Action Centre とは。JICA サイトより  
[https://www.jica.go.jp/Resource/project/cambodia/0701732/outline/ku57pq0000231j8w-att/cmac\\_01.pdf](https://www.jica.go.jp/Resource/project/cambodia/0701732/outline/ku57pq0000231j8w-att/cmac_01.pdf)

Phnom Penh Teacher Education College ウェブサイト <https://www.ptec.edu.kh/>